汚嫁さんを舐め洗う

買われた・・・
５００万ポンド・・・大金だ。
自分で自分自身を出品しておきながら言うのもなんだが
まさかこれほどの値段がつくなんて、驚き以外の何ものでもない。
こばらくこれ以上に驚くコトなど無いだろう・・・と思っていた矢先
それを軽く飛び越えてくる驚愕の事実。
そう、それは私の買い主であり飼い主
自称「魔法使い」　どうやら人間ではないらしい・・・

オークションで人を買おうなんて連中の集まりだ。
誰に買われたところで、そこそこまともな人間の下では暮らせまいと、ある程度の覚悟はしていたが
まさか人外とは・・・

しかしこの魔法使い、そのエトとはかけ離れた恐ろしい風形の姿とは豪腹に
穏やかな口調と落ち着いた物腰・・・まさに怪物紳士。
なにやら私のコトも大切に扱ってくれるつもりのようだ。
魔法使いの弟子にする・・・とかなんとか。
もくは解らないが私にはその才能があるらしい。

今まで、ここに居て良いなんて言われたコトが無かった。
全てに疎まれ、孤独と絶望の中で生きてきた私には、こんな怪物の言葉ですら心地好い。
こんな私でも必要だと言ってくれるのなら、この怪物に着いていこうと思う。
たとえ飽きたら捨てられる、ただのおもちゃだったとしても。

そして何だかんだでここ、イングランドの片田舎にある住処に連れてこられたのだが・・・

買われた・・・
５００万ポンド・・・大金だ。
自分で自分自身を出品しておきながら言うのもなんだが
まさかこれほどの値段がつくなんて、驚き以外の何ものでもない。
こばらくこれ以上に驚くコトなど無いだろう・・・と思っていた矢先
それを軽く飛び越えてくる驚愕の事実。
そう、それは私の買い主であり飼い主
自称「魔法使い」　どうやら人間ではないらしい・・・

オークションで人を買おうなんて連中の集まりだ。
誰に買われたところで、そこそこまともな人間の下では暮らせまいと、ある程度の覚悟はしていたが
まさか人外とは・・・

しかしこの魔法使い、そのエトとはかけ離れた恐ろしい風形の姿とは豪腹に
穏やかな口調と落ち着いた物腰・・・まさに怪物紳士。
なにやら私のコトも大切に扱ってくれるつもりのようだ。
魔法使いの弟子にする・・・とかなんとか。
もくは解らないが私にはその才能があるらしい。

今まで、ここに居て良いなんて言われたコトが無かった。
全てに疎まれ、孤独と絶望の中で生きてきた私には、こんな怪物の言葉ですら心地好い。
こんな私でも必要だと言ってくれるのなら、この怪物に着いていこうと思う。
たとえ飽きたら捨てられる、ただのおもちゃだったとしても。

そして何だかんだでここ、イングランドの片田舎にある住処に連れてこられたのだが・・・

買われた・・・
５００万ポンド・・・大金だ。
自分で自分自身を出品しておきながら言うのもなんだが
まさかこれほどの値段がつくなんて、驚き以外の何ものでもない。
こばらくこれ以上に驚くコトなど無いだろう・・・と思っていた矢先
それを軽く飛び越えてくる驚愕の事実。
そう、それは私の買い主であり飼い主
自称「魔法使い」　どうやら人間ではないらしい・・・

オークションで人を買おうなんて連中の集まりだ。
誰に買われたところで、そこそこまともな人間の下では暮らせまいと、ある程度の覚悟はしていたが
まさか人外とは・・・

しかしこの魔法使い、そのエトとはかけ離れた恐ろしい風形の姿とは豪腹に
穏やかな口調と落ち着いた物腰・・・まさに怪物紳士。
なにやら私のコトも大切に扱ってくれるつもりのようだ。
魔法使いの弟子にする・・・とかなんとか。
もくは解らないが私にはその才能があるらしい。

今まで、ここに居て良いなんて言われたコトが無かった。
全てに疎まれ、孤独と絶望の中で生きてきた私には、こんな怪物の言葉ですら心地好い。
こんな私でも必要だと言ってくれるのなら、この怪物に着いていこうと思う。
たとえ飽きたら捨てられる、ただのおもちゃだったとしても。

そして何だかんだでここ、イングランドの片田舎にある住処に連れてこられたのだが・・・

買われた・・・
５００万ポンド・・・大金だ。
自分で自分自身を出品しておきながら言うのもなんだが
まさかこれほどの値段がつくなんて、驚き以外の何ものでもない。
こばらくこれ以上に驚くコトなど無いだろう・・・と思っていた矢先
それを軽く飛び越えてくる驚愕の事実。
そう、それは私の買い主であり飼い主
自称「魔法使い」　どうやら人間ではないらしい・・・

オークションで人を買おうなんて連中の集まりだ。
誰に買われたところで、そこそこまともな人間の下では暮らせまいと、ある程度の覚悟はしていたが
まさか人外とは・・・

しかしこの魔法使い、そのエトとはかけ離れた恐ろしい風形の姿とは豪腹に
穏やかな口調と落ち着いた物腰・・・まさに怪物紳士。
なにやら私のコトも大切に扱ってくれるつもりのようだ。
魔法使いの弟子にする・・・とかなんとか。
もくは解らないが私にはその才能があるらしい。

今まで、ここに居て良いなんて言われたコトが無かった。
全てに疎まれ、孤独と絶望の中で生きてきた私には、こんな怪物の言葉ですら心地好い。
こんな私でも必要だと言ってくれるのなら、この怪物に着いていこうと思う。
たとえ飽きたら捨てられる、ただのおもちゃだったとしても。

そして何だかんだでここ、イングランドの片田舎にある住処に連れてこられたのだが・・・

（剥かれるっ！剥かれちゃうっ!!）
（いや当然こういう事態も想定してたけど・・・違う・・・これはなんか違う！）
「ほら 小汚いから洗ってあげるよ」
「あっ いやっ ちょっ・・・お風呂くらい一人で入れますから！」
（まるで拾ってきた子犬でも扱うように・・・）
（卑猥なコトしか考えてない相手なら逆に開き直れるけど
下心が感じられない人の前で冷静に裸にされるのは・・・なんか恥ずかしい！）
（あっ 人じゃないけど！）
イヤ イヤ イヤ イヤ
フルフル
ブイッ
ぎゅっ

（剥かれるっ！剥かれちゃうっ!!）
（いや当然こういう事態も想定してたけど・・・違う・・・これはなんか違う！）
「ほら 小汚いから洗ってあげるよ」
「あっ いやっ ちょっ・・・お風呂くらい一人で入れますから！」
（まるで拾ってきた子犬でも扱うように・・・）
（卑猥なコトしか考えてない相手なら逆に開き直れるけど
下心が感じられない人の前で冷静に裸にされるのは・・・なんか恥ずかしい！）
（あっ 人じゃないけど！）
イヤ イヤ イヤ イヤ
フルフル
ブイッ
ぎゅっ

（剥かれるっ！剥かれちゃうっ!!）
（いや当然こういう事態も想定してたけど・・・違う・・・これはなんか違う！）
「ほら 小汚いから洗ってあげるよ」
「あっ いやっ ちょっ・・・お風呂くらい一人で入れますから！」
（まるで拾ってきた子犬でも扱うように・・・）
（卑猥なコトしか考えてない相手なら逆に開き直れるけど
下心が感じられない人の前で冷静に裸にされるのは・・・なんか恥ずかしい！）
（あっ 人じゃないけど！）
イヤ イヤ イヤ イヤ
フルフル
ブイッ
ぎゅっ

（剥かれるっ！剥かれちゃうっ!!）
（いや当然こういう事態も想定してたけど・・・違う・・・これはなんか違う！）
「ほら 小汚いから洗ってあげるよ」
「あっ いやっ ちょっ・・・お風呂くらい一人で入れますから！」
（まるで拾ってきた子犬でも扱うように・・・）
（卑猥なコトしか考えてない相手なら逆に開き直れるけど
下心が感じられない人の前で冷静に裸にされるのは・・・なんか恥ずかしい！）
（あっ 人じゃないけど！）
イヤ イヤ イヤ イヤ
フルフル
ブイッ
ぎゅっ

「会場で会った時からずっと汚臭が漂ってて　もう鼻が曲がりそうだよ」
「あっ・・・それは・・・ご・・・ごめんなさい・・・」

「せっかく高値で買ったモノだもの　ちゃんと自分でキレイにしておきたいんだ」
「そ・・・それを言われると・・・」
（5百万ポンド・・・日本円にして約7億5千万円・・・そうだった・・・
今　私はこの人の持ち物なんだ・・・人じゃないけど）
「ほら　シャツを脱がなきゃ　腕を上げて」
「あっ・・・」

「会場で会った時からずっと汚臭が漂ってて　もう鼻が曲がりそうだよ」
「あっ・・・それは・・・ご・・・ごめんなさい・・・」

「せっかく高値で買ったモノだもの　ちゃんと自分でキレイにしておきたいんだ」
「そ・・・それを言われると・・・」
（5百万ポンド・・・日本円にして約7億5千万円・・・そうだった・・・
今　私はこの人の持ち物なんだ・・・人じゃないけど）
「ほら　シャツを脱がなきゃ　腕を上げて」
「あっ・・・」

「会場で会った時からずっと汚臭が漂ってて　もう鼻が曲がりそうだよ」
「あっ・・・それは・・・ご・・・ごめんなさい・・・」

「せっかく高値で買ったモノだもの　ちゃんと自分でキレイにしておきたいんだ」
「そ・・・それを言われると・・・」
（5百万ポンド・・・日本円にして約7億5千万円・・・そうだった・・・
今　私はこの人の持ち物なんだ・・・人じゃないけど）
「ほら　シャツを脱がなきゃ　腕を上げて」
「あっ・・・」

「会場で会った時からずっと汚臭が漂ってて　もう鼻が曲がりそうだよ」
「あっ・・・それは・・・ご・・・ごめんなさい・・・」

「せっかく高値で買ったモノだもの　ちゃんと自分でキレイにしておきたいんだ」
「そ・・・それを言われると・・・」
（5百万ポンド・・・日本円にして約7億5千万円・・・そうだった・・・
今　私はこの人の持ち物なんだ・・・人じゃないけど）
「ほら　シャツを脱がなきゃ　腕を上げて」
「あっ・・・」

「すごいな・・・腕を上げた途端に腋の汗臭いニオイが一気に・・・うっ」
「うぅっ・・・」
「それにしても・・・こんなに臭くて今まで恥ずかしくなかったの？
お風呂にはちゃんと入ってなかったのかい？」
「は・・・恥ずかしかったですけど・・・・・・」
「何かあるのかい？」
「・・・10歳になった頃からだったと思います・・・」

「すごいな・・・腕を上げた途端に腋の汗臭いニオイが一気に・・・うっ」
「うぅっ・・・」
「それにしても・・・こんなに臭くて今まで恥ずかしくなかったの？
お風呂にはちゃんと入ってなかったのかい？」
「は・・・恥ずかしかったですけど・・・・・・」
「何かあるのかい？」
「・・・10歳になった頃からだったと思います・・・」

「すごいな・・・腕を上げた途端に腋の汗臭いニオイが一気に・・・うっ」
「うぅっ・・・」
「それにしても・・・こんなに臭くて今まで恥ずかしくなかったの？
お風呂にはちゃんと入ってなかったのかい？」
「は・・・恥ずかしかったですけど・・・・・・」
「何かあるのかい？」
「・・・10歳になった頃からだったと思います・・・」

「すごいな・・・腕を上げた途端に腋の汗臭いニオイが一気に・・・うっ」
「うぅっ・・・」
「それにしても・・・こんなに臭くて今まで恥ずかしくなかったの？
お風呂にはちゃんと入ってなかったのかい？」
「は・・・恥ずかしかったですけど・・・・・・」
「何かあるのかい？」
「・・・10歳になった頃からだったと思います・・・」

「どこのお風呂場に行っても変な黒いヌルヌルの海鼠みたいな子達が出てくるようになって出るだけなら良かったんですけど・・・」
「何故か私の身体に空いてる穴という穴から無理矢理中に入ってこようとするんです・・・もう恐くて・・・」
「だから普段はタオルで拭くくらいで もう3年くらいまともにお風呂には入ってないです・・・」
「それはまっくろくろ太郎だね」
「えっ？ まっくろ・・・くろ・・・？」

「浴室に棲み着く妖精だよ 特に少女のいる家のね」
「明るいところが苦手で、すぐ少女の暗く湿ったところに逃げ込もうとするんだ」
「チセは見えてたから大丈夫だったみたいだけど 普通の人間に妖精は見えないからね」
「知らずに穴に入り込まれた少女は入られた分だけどんどん穢れていくんだ」
「そしてある程度穢れがすすむと月経が始まると言われている 有名な妖精だね（大嘘）」
「『まっくろくろ太郎でておいき でないと目玉をたべちゃうぞ』って唱えると翌朝にはいなくなってるよ」
「でもまあ すぐに新しいのが棲み着くんだけどね」
「へ・・・へぇ・・・そ・・・そうなんですね・・・」
「大丈夫 ここには入ってこられないようにしてあるから」

「どこのお風呂場に行っても変な黒いヌルヌルの海鼠みたいな子達が出てくるようになって出るだけなら良かったんですけど・・・」
「何故か私の身体に空いてる穴という穴から無理矢理中に入ってこようとするんです・・・もう恐くて・・・」
「だから普段はタオルで拭くくらいで もう3年くらいまともにお風呂には入ってないです・・・」
「それはまっくろくろ太郎だね」
「えっ？ まっくろ・・・くろ・・・？」

「浴室に棲み着く妖精だよ 特に少女のいる家のね」
「明るいところが苦手で、すぐ少女の暗く湿ったところに逃げ込もうとするんだ」
「チセは見えてたから大丈夫だったみたいだけど 普通の人間に妖精は見えないからね」
「知らずに穴に入り込まれた少女は入られた分だけどんどん穢れていくんだ」
「そしてある程度穢れがすすむと月経が始まると言われている 有名な妖精だね（大嘘）」
「『まっくろくろ太郎でておいき でないと目玉をたべちゃうぞ』って唱えると翌朝にはいなくなってるよ」
「でもまあ すぐに新しいのが棲み着くんだけどね」
「へ・・・へぇ・・・そ・・・そうなんですね・・・」
「大丈夫 ここには入ってこられないようにしてあるから」

「どこのお風呂場に行っても変な黒いヌルヌルの海鼠みたいな子達が出てくるようになって出るだけなら良かったんですけど・・・」
「何故か私の身体に空いてる穴という穴から無理矢理中に入ってこようとするんです・・・もう恐くて・・・」
「だから普段はタオルで拭くくらいで もう3年くらいまともにお風呂には入ってないです・・・」
「それはまっくろくろ太郎だね」
「えっ？ まっくろ・・・くろ・・・？」

「浴室に棲み着く妖精だよ 特に少女のいる家のね」
「明るいところが苦手で、すぐ少女の暗く湿ったところに逃げ込もうとするんだ」
「チセは見えてたから大丈夫だったみたいだけど 普通の人間に妖精は見えないからね」
「知らずに穴に入り込まれた少女は入られた分だけどんどん穢れていくんだ」
「そしてある程度穢れがすすむと月経が始まると言われている 有名な妖精だね（大嘘）」
「『まっくろくろ太郎でておいき でないと目玉をたべちゃうぞ』って唱えると翌朝にはいなくなってるよ」
「でもまあ すぐに新しいのが棲み着くんだけどね」
「へ・・・へぇ・・・そ・・・そうなんですね・・・」
「大丈夫 ここには入ってこられないようにしてあるから」

「どこのお風呂場に行っても変な黒いヌルヌルの海鼠みたいな子達が出てくるようになって出るだけなら良かったんですけど・・・」
「何故か私の身体に空いてる穴という穴から無理矢理中に入ってこようとするんです・・・もう恐くて・・・」
「だから普段はタオルで拭くくらいで もう3年くらいまともにお風呂には入ってないです・・・」
「それはまっくろくろ太郎だね」
「えっ？ まっくろ・・・くろ・・・？」

「浴室に棲み着く妖精だよ 特に少女のいる家のね」
「明るいところが苦手で、すぐ少女の暗く湿ったところに逃げ込もうとするんだ」
「チセは見えてたから大丈夫だったみたいだけど 普通の人間に妖精は見えないからね」
「知らずに穴に入り込まれた少女は入られた分だけどんどん穢れていくんだ」
「そしてある程度穢れがすすむと月経が始まると言われている 有名な妖精だね（大嘘）」
「『まっくろくろ太郎でておいき でないと目玉をたべちゃうぞ』って唱えると翌朝にはいなくなってるよ」
「でもまあ すぐに新しいのが棲み着くんだけどね」
「へ・・・へぇ・・・そ・・・そうなんですね・・・」
「大丈夫 ここには入ってこられないようにしてあるから」

「でも全身に汚れが溜まってるんだったとしたら僕の強靭な舌でもさすがに疲れそうだな」
「えっ？　あれ？　あの・・・一応聞きますが・・・キレイにするってどうやって？」
「当然この舌を使ってキレイに舐め洗うんだよ　人間ってそうなんでしょ？」
「はいっ？！」

「スレイ・ベガであるチセは別として　僕は昔から人間が嫌いなんでよく知らないんだけど
昔見た古い文献にそう書いてあったよ？」
「そんなわけっ・・・あっ！！」
「ほら　猫の子みたいに騒がないの」
「んぎゃあっ！！」

「でも全身に汚れが溜まってるんだったとしたら僕の強靭な舌でもさすがに疲れそうだな」
「えっ？　あれ？　あの・・・一応聞きますが・・・キレイにするってどうやって？」
「当然この舌を使ってキレイに舐め洗うんだよ　人間ってそうなんでしょ？」
「はいっ？！」

「スレイ・ベガであるチセは別として　僕は昔から人間が嫌いなんでよく知らないんだけど
昔見た古い文献にそう書いてあったよ？」
「そんなわけっ・・・あっ！！」
「ほら　猫の子みたいに騒がないの」
「んぎゃあっ！！」

ペロペロ

「でも全身に汚れが溜まってるんだったとしたら僕の強靭な舌でもさすがに疲れそうだな」
「えっ？　あれ？　あの・・・一応聞きますが・・・キレイにするってどうやって？」
「当然この舌を使ってキレイに舐め洗うんだよ　人間ってそうなんでしょ？」
「はいっ？！」

「スレイ・ベガであるチセは別として　僕は昔から人間が嫌いなんでよく知らないんだけど
昔見た古い文献にそう書いてあったよ？」
「そんなわけっ・・・あっ！！」
「ほら　猫の子みたいに騒がないの」
「んぎゃあっ！！」

「でも全身に汚れが溜まってるんだったとしたら僕の強靭な舌でもさすがに疲れそうだな」
「えっ？　あれ？　あの・・・一応聞きますが・・・キレイにするってどうやって？」
「当然この舌を使ってキレイに舐め洗うんだよ　人間ってそうなんでしょ？」
「はいっ？！」

「スレイ・ベガであるチセは別として　僕は昔から人間が嫌いなんでよく知らないんだけど
昔見た古い文献にそう書いてあったよ？」
「そんなわけっ・・・あっ！！」
「ほら　猫の子みたいに騒がないの」
「んぎゃあっ！！」

「とにかく臭くて汚れてるところから重点的にキレイにしていこうね」
「まずはこのくっさい腋の下から」
「んんっ!!」
「なるほど　臭いけどしょっぱくて美味しいんだね
これがわざわざ舐める理由ってコトなのかな？」
「そんな・・・私の腋が・・・美味しいなんて・・・」

「へぇ　人間の腋にはこんなに硬くて短い毛が生えてるのか」
「そっ・・・それはちがっ・・・いえ・・・なんでも・・・」
「うむ　舐めてると美味しいんだけど少し痛いかな・・・舌が摩り下ろされちゃいそうだ」
（うう・・・なんかすごく恥ずかしいコト言われてる・・・）
（こんな中途半端に生えた腋毛を見られるなんて・・・
これなら完全に生えちゃってた方がまだマシだった気がする・・・）

「とにかく臭くて汚れてるところから重点的にキレイにしていこうね」
「まずはこのくっさい腋の下から」
「んんっ!!」
「なるほど　臭いけどしょっぱくて美味しいんだね
これがわざわざ舐める理由ってコトなのかな？」
「そんな・・・私の腋が・・・美味しいなんて・・・」

「へぇ　人間の腋にはこんなに硬くて短い毛が生えてるのか」
「そっ・・・それはちがっ・・・いえ・・・なんでも・・・」
「うむ　舐めてると美味しいんだけど少し痛いかな・・・舌が摩り下ろされちゃいそうだ」
（うう・・・なんかすごく恥ずかしいコト言われてる・・・）
（こんな中途半端に生えた腋毛を見られるなんて・・・
これなら完全に生えちゃってた方がまだマシだった気がする・・・）

「とにかく臭くて汚れてるところから重点的にキレイにしていこうね」
「まずはこのくっさい腋の下から」
「んんっ!!」
「なるほど　臭いけどしょっぱくて美味しいんだね
これがわざわざ舐める理由ってコトなのかな？」
「そんな・・・私の腋が・・・美味しいなんて・・・」

「へぇ　人間の腋にはこんなに硬くて短い毛が生えてるのか」
「そっ・・・それはちがっ・・・いえ・・・なんでも・・・」
「うむ　舐めてると美味しいんだけど少し痛いかな・・・舌が摩り下ろされちゃいそうだ」
（うう・・・なんかすごく恥ずかしいコト言われてる・・・）
（こんな中途半端に生えた腋毛を見られるなんて・・・
これなら完全に生えちゃってた方がまだマシだった気がする・・・）

「とにかく臭くて汚れてるところから重点的にキレイにしていこうね」
「まずはこのくっさい腋の下から」
「んんっ!!」
「なるほど　臭いけどしょっぱくて美味しいんだね
これがわざわざ舐める理由ってコトなのかな？」
「そんな・・・私の腋が・・・美味しいなんて・・・」

「へぇ　人間の腋にはこんなに硬くて短い毛が生えてるのか」
「そっ・・・それはちがっ・・・いえ・・・なんでも・・・」
「うむ　舐めてると美味しいんだけど少し痛いかな・・・舌が摩り下ろされちゃいそうだ」
（うう・・・なんかすごく恥ずかしいコト言われてる・・・）
（こんな中途半端に生えた腋毛を見られるなんて・・・
これなら完全に生えちゃってた方がまだマシだった気がする・・・）

「もう　ほとんど味がしなくなってきた　確かこうなると汚掃除完了なんだよね？」
「・・・違うと思います」
「次は何処にしようか・・・何処か臭いところは・・・スンスン・・・スンスン・・・」
（あんなに汗臭かった腋の下を味がしなくなるまで舐めるなんて・・・）
（本気でコレが人間の洗い方だと思ってるのかな・・・昔見た文献って・・・何読んだんだろ・・・）
（でもこのままだと・・・いったいどこまで？）

「もう　ほとんど味がしなくなってきた　確かこうなると汚掃除完了なんだよね？」
「・・・違うと思います」
「次は何処にしようか・・・何処か臭いところは・・・スンスン・・・スンスン・・・」
（あんなに汗臭かった腋の下を味がしなくなるまで舐めるなんて・・・）
（本気でコレが人間の洗い方だと思ってるのかな・・・昔見た文献って・・・何読んだんだろ・・・）
（でもこのままだと・・・いったいどこまで？）

「もう　ほとんど味がしなくなってきた　確かこうなると汚掃除完了なんだよね？」
「・・・違うと思います」
「次は何処にしようか・・・何処か臭いところは・・・スンスン・・・スンスン・・・」
（あんなに汗臭かった腋の下を味がしなくなるまで舐めるなんて・・・）
（本気でコレが人間の洗い方だと思ってるのかな・・・昔見た文献って・・・何読んだんだろ・・・）
（でもこのままだと・・・いったいどこまで？）

「もう　ほとんど味がしなくなってきた　確かこうなると汚掃除完了なんだよね？」
「・・・違うと思います」
「次は何処にしようか・・・何処か臭いところは・・・スンスン・・・スンスン・・・」
（あんなに汗臭かった腋の下を味がしなくなるまで舐めるなんて・・・）
（本気でコレが人間の洗い方だと思ってるのかな・・・昔見た文献って・・・何読んだんだろ・・・）
（でもこのままだと・・・いったいどこまで？）

ピクッ
「うん　臭いね　ここがいい　足にしよう」
（バレたっ!!　ずっと裸足だったから蒸れなくてイイと思ってたけど・・・
それでもやっぱり臭かったか・・・私の足!!）
（自覚はあった　引き取られた先々で私が疎まれてたのは　変なモノが見えるからじゃなくて
ただ足が臭かったからなんじゃないかと思えてしまうくらいには・・・）
（最後に引き取られた家のオジサンなんて特にあからさまだった）
（毎日毎日洗濯カゴの中から私の靴下を探し出しては　わざわざ私の目の前でニオイを嗅いで
『おい　これはいったい誰の靴下だ?!　これだけの汚臭を放つ靴下を育てられるなんて人間の仕業じゃねぇ!
本当にこれだけ靴下を臭くできる人間がいるなら　一度顔が見てみたいもんだ!』
なんて嫌みを言うのが生き甲斐のような人だった・・・）
（怖いくらいに目を血走らせて息を荒げながら・・・よっぽど臭かったんだろうな・・・）
（ていうか　今はそんなコト思い出してる場合じゃなかった!）

ピクッ
「うん　臭いね　ここがいい　足にしよう」
（バレたっ!!　ずっと裸足だったから蒸れなくてイイと思ってたけど・・・
それでもやっぱり臭かったか・・・私の足!!）
（自覚はあった　引き取られた先々で私が疎まれてたのは　変なモノが見えるからじゃなくて
ただ足が臭かったからなんじゃないかと思えてしまうくらいには・・・）
（最後に引き取られた家のオジサンなんて特にあからさまだった）
（毎日毎日洗濯カゴの中から私の靴下を探し出しては　わざわざ私の目の前でニオイを嗅いで
『おい　これはいったい誰の靴下だ?!　これだけの汚臭を放つ靴下を育てられるなんて人間の仕業じゃねぇ!
本当にこれだけ靴下を臭くできる人間がいるなら　一度顔が見てみたいもんだ!』
なんて嫌みを言うのが生き甲斐のような人だった・・・）
（怖いくらいに目を血走らせて息を荒げながら・・・よっぽど臭かったんだろうな・・・）
（ていうか　今はそんなコト思い出してる場合じゃなかった!）

ピクッ
「うん　臭いね　ここがいい　足にしよう」
（バレたっ!!　ずっと裸足だったから蒸れなくてイイと思ってたけど・・・
それでもやっぱり臭かったか・・・私の足!!）
（自覚はあった　引き取られた先々で私が疎まれてたのは　変なモノが見えるからじゃなくて
ただ足が臭かったからなんじゃないかと思えてしまうくらいには・・・）
（最後に引き取られた家のオジサンなんて特にあからさまだった）
（毎日毎日洗濯カゴの中から私の靴下を探し出しては　わざわざ私の目の前でニオイを嗅いで
『おい　これはいったい誰の靴下だ?!　これだけの汚臭を放つ靴下を育てられるなんて人間の仕業じゃねぇ!
本当にこれだけ靴下を臭くできる人間がいるなら　一度顔が見てみたいもんだ!』
なんて嫌みを言うのが生き甲斐のような人だった・・・）
（怖いくらいに目を血走らせて息を荒げながら・・・よっぽど臭かったんだろうな・・・）
（ていうか　今はそんなコト思い出してる場合じゃなかった!）

ピクッ
「うん　臭いね　ここがいい　足にしよう」
（バレたっ!!　ずっと裸足だったから蒸れなくてイイと思ってたけど・・・
それでもやっぱり臭かったか・・・私の足!!）
（自覚はあった　引き取られた先々で私が疎まれてたのは　変なモノが見えるからじゃなくて
ただ足が臭かったからなんじゃないかと思えてしまうくらいには・・・）
（最後に引き取られた家のオジサンなんて特にあからさまだった）
（毎日毎日洗濯カゴの中から私の靴下を探し出しては　わざわざ私の目の前でニオイを嗅いで
『おい　これはいったい誰の靴下だ?!　これだけの汚臭を放つ靴下を育てられるなんて人間の仕業じゃねぇ!
本当にこれだけ靴下を臭くできる人間がいるなら　一度顔が見てみたいもんだ!』
なんて嫌みを言うのが生き甲斐のような人だった・・・）
（怖いくらいに目を血走らせて息を荒げながら・・・よっぽど臭かったんだろうな・・・）
（ていうか　今はそんなコト思い出してる場合じゃなかった!）

「少し湿ってるね　それに腋よりも少し酸っぱいニオイがする」
「いっ　いちいち感想言わなくていいですよ・・・臭いのは自覚してますし・・・」
「改めて他人に指摘されると恥ずかしいので・・・」
「そんなに恥ずかしいと思ってたのなら僕もチセのために頑張らないとね」
「んっ？」
「もう恥ずかしがらなくて済むように頑張ってチセの足をキレイに舐め洗ってあげるから」
（うん　そうじゃないんだけどなぁ・・・）

「少し湿ってるね　それに腋よりも少し酸っぱいニオイがする」
「いっ　いちいち感想言わなくていいですよ・・・臭いのは自覚してますし・・・」
「改めて他人に指摘されると恥ずかしいので・・・」
「そんなに恥ずかしいと思ってたのなら僕もチセのために頑張らないとね」
「んっ？」
「もう恥ずかしがらなくて済むように頑張ってチセの足をキレイに舐め洗ってあげるから」
（うん　そうじゃないんだけどなぁ・・・）

「少し湿ってるね　それに腋よりも少し酸っぱいニオイがする」
「いっ　いちいち感想言わなくていいですよ・・・臭いのは自覚してますし・・・」
「改めて他人に指摘されると恥ずかしいので・・・」
「そんなに恥ずかしいと思ってたのなら僕もチセのために頑張らないとね」
「んっ？」
「もう恥ずかしがらなくて済むように頑張ってチセの足をキレイに舐め洗ってあげるから」
（うん　そうじゃないんだけどなぁ・・・）

「少し湿ってるね　それに腋よりも少し酸っぱいニオイがする」
「いっ　いちいち感想言わなくていいですよ・・・臭いのは自覚してますし・・・」
「改めて他人に指摘されると恥ずかしいので・・・」
「そんなに恥ずかしいと思ってたのなら僕もチセのために頑張らないとね」
「んっ？」
「もう恥ずかしがらなくて済むように頑張ってチセの足をキレイに舐め洗ってあげるから」
（うん　そうじゃないんだけどなぁ・・・）

「しかし・・・ニオイだけじゃなくて汚れも酷いな」
「指の間にたくさんの垢やゴミカスが溜まってる・・・これは大仕事になりそうだ」
「ちょっ！　汚い汚いっ！　さすがにゴミは普通に取りましょうよ！」
「爪の垢もたっぷり溜まって・・・くはっ!!」
「コレは強烈なニオイがするね　よし　これもしっかり舐め取らないと」
「だから　どうしてそうなりますかっ?!　そんなの口に入れちゃだめでしょ?!」
「え？　何で？」
「何でって・・・」
「たとえばチセが僕みたいな怪物になって　人間を襲って食べちゃうぞぉ　ってなったら
そんなの気にして食べないでしょ？」
（な・・・なん・・・だと？　・・・・・・けっこうな正論がきた・・・）

「しかし・・・ニオイだけじゃなくて汚れも酷いな」
「指の間にたくさんの垢やゴミカスが溜まってる・・・これは大仕事になりそうだ」
「ちょっ！　汚い汚いっ！　さすがにゴミは普通に取りましょうよ！」
「爪の垢もたっぷり溜まって・・・くはっ!!」
「コレは強烈なニオイがするね　よし　これもしっかり舐め取らないと」
「だから　どうしてそうなりますかっ?!　そんなの口に入れちゃだめでしょ?!」
「え？　何で？」
「何でって・・・」
「たとえばチセが僕みたいな怪物になって　人間を襲って食べちゃうぞぉ　ってなったら
そんなの気にして食べないでしょ？」
（な・・・なん・・・だと？　・・・・・・けっこうな正論がきた・・・）

「しかし・・・ニオイだけじゃなくて汚れも酷いな」
「指の間にたくさんの垢やゴミカスが溜まってる・・・これは大仕事になりそうだ」
「ちょっ！　汚い汚いっ！　さすがにゴミは普通に取りましょうよ！」
「爪の垢もたっぷり溜まって・・・くはっ!!」
「コレは強烈なニオイがするね　よし　これもしっかり舐め取らないと」
「だから　どうしてそうなりますかっ?!　そんなの口に入れちゃだめでしょ?!」
「え？　何で？」
「何でって・・・」
「たとえばチセが僕みたいな怪物になって　人間を襲って食べちゃうぞぉ　ってなったら
そんなの気にして食べないでしょ？」
（な・・・なん・・・だと？　・・・・・・けっこうな正論がきた・・・）

「しかし・・・ニオイだけじゃなくて汚れも酷いな」
「指の間にたくさんの垢やゴミカスが溜まってる・・・これは大仕事になりそうだ」
「ちょっ！　汚い汚いっ！　さすがにゴミは普通に取りましょうよ！」
「爪の垢もたっぷり溜まって・・・くはっ!!」
「コレは強烈なニオイがするね　よし　これもしっかり舐め取らないと」
「だから　どうしてそうなりますかっ?!　そんなの口に入れちゃだめでしょ?!」
「え？　何で？」
「何でって・・・」
「たとえばチセが僕みたいな怪物になって　人間を襲って食べちゃうぞぉ　ってなったら
そんなの気にして食べないでしょ？」
（な・・・なん・・・だと？　・・・・・・けっこうな正論がきた・・・）

（と　とにかく　このくらいで終わらせないと・・・このままじゃ・・・）
「・・・うーん・・・・・・何だろ・・・」
「ど・・・どうしました？」
「背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「さぁ・・・」
「だよね・・・」
「こんな感覚は始めてだけど・・・まあいいや　今はチセをキレイにしないと」
「そろそろ味がしなくなってきたね　これなら大丈夫そうだ」
「そ・・・そうですか？　それならもうイイですよね？　もうコレでおしまいにしませんか？」
「そんなわけないでしょ？　まだまだ汚れてるところがいっぱいあるのに」
「大丈夫です　あとは自分でやりますから　ね？」
「なに言ってるの？　こんなところ自分じゃ舐められないでしょ？」
「え？　こんなところって・・・んあっ！」

（と　とにかく　このくらいで終わらせないと・・・このままじゃ・・・）
「・・・うーん・・・・・・何だろ・・・」
「ど・・・どうしました？」
「背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「さぁ・・・」
「だよね・・・」
「こんな感覚は始めてだけど・・・まあいいや　今はチセをキレイにしないと」
「そろそろ味がしなくなってきたね　これなら大丈夫そうだ」
「そ・・・そうですか？　それならもうイイですよね？　もうコレでおしまいにしませんか？」
「そんなわけないでしょ？　まだまだ汚れてるところがいっぱいあるのに」
「大丈夫です　あとは自分でやりますから　ね？」
「なに言ってるの？　こんなところ自分じゃ舐められないでしょ？」
「え？　こんなところって・・・んあっ！」

（と　とにかく　このくらいで終わらせないと・・・このままじゃ・・・）
「・・・うーん・・・・・・何だろ・・・」
「ど・・・どうしました？」
「背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「さぁ・・・」
「だよね・・・」
「こんな感覚は始めてだけど・・・まあいいや　今はチセをキレイにしないと」
「そろそろ味がしなくなってきたね　これなら大丈夫そうだ」
「そ・・・そうですか？　それならもうイイですよね？　もうコレでおしまいにしませんか？」
「そんなわけないでしょ？　まだまだ汚れてるところがいっぱいあるのに」
「大丈夫です　あとは自分でやりますから　ね？」
「なに言ってるの？　こんなところ自分じゃ舐められないでしょ？」
「え？　こんなところって・・・んあっ！」

（と　とにかく　このくらいで終わらせないと・・・このままじゃ・・・）
「・・・うーん・・・・・・何だろ・・・」
「ど・・・どうしました？」
「背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「さぁ・・・」
「だよね・・・」
「こんな感覚は始めてだけど・・・まあいいや　今はチセをキレイにしないと」
「そろそろ味がしなくなってきたね　これなら大丈夫そうだ」
「そ・・・そうですか？　それならもうイイですよね？　もうコレでおしまいにしませんか？」
「そんなわけないでしょ？　まだまだ汚れてるところがいっぱいあるのに」
「大丈夫です　あとは自分でやりますから　ね？」
「なに言ってるの？　こんなところ自分じゃ舐められないでしょ？」
「え？　こんなところって・・・んあっ！」

「排泄口だも　やっぱりココが一番汚れてるんじゃないかな」
「排泄・・・って・・・ここって!?　そこ!?」

「ほら　もっとちゃんとお尻を突き出さないと　ちゃんと舐められないでしょ」
「いやいやいや　ダメですって！　そんなところ舐めちゃダメですから！」
「ダメなのはチセでしょ？　こびりついたウ○チが乾いてカピカピになってるよ？　ちゃんとキレイにしないと」
「そんなの余計に舐めちゃダメですって!!」
（えっ?!　ていうか私ウ○チついてるの?!　ちゃんと拭いたハズなのに!!）
「ほら　おとなしくして」
「ソアッ!!」

「排泄口だも　やっぱりリリが一番汚れてるんじゃないかな」
「排泄・・・って・・・ここって!!　そこ!!」
「ほら　もっとちゃんとお尻を突き出さないと　ちゃんと舐められないでしょ」
「いやいやいや　ダメですって！　そんなところ舐めちゃダメですから！」
「ダメなのはチセでしょ？　こびりついたウ○チが乾いてカピカピになってるよ？　ちゃんとキレイにしないと」
「そんなの余計に舐めちゃダメですって!!」
（えっ?!　ていうか私ウ○チついてるの?!　ちゃんと拭いたハズなのに!!）
「ほら　おとなしくして」
「ンアッ!!」

「排泄口だも　やっぱりリリが一番汚れてるんじゃないかな」
「排泄・・・って・・・ここで!?　そこで!?」

「ほら　もっとちゃんとお尻を突き出さないと　ちゃんと舐められないでしょ」
「いやいやいや　ダメですって！　そんなところ舐めちゃダメですから！」
「ダメなのはチセでしょ？　こびりついたウ○チが乾いてカピカピになってるよ？　ちゃんとキレイにしないと」
「そんなの余計に舐めちゃダメですって!!」
（えっ?!　ていうか私ウ○チついてるの?!　ちゃんと拭いたハズなのに!!）
「ほら　おとなしくして」
「ソアッ!!」

「排泄口だも　やっぱりリリが一番汚れてるんじゃないかな」
「排泄・・・って・・・ここって!!　そこ!!」
「ほら　もっとちゃんとお尻を突き出さないと　ちゃんと舐められないでしょ」
「いやいやいや　ダメですって！　そんなところ舐めちゃダメですから！」
「ダメなのはチセでしょ？　こびりついたウ○チが乾いてカピカピになってるよ？　ちゃんとキレイにしないと」
「そんなの余計に舐めちゃダメですって!!」
（えっ?!　ていうか私ウ○チついてるの?!　ちゃんと拭いたハズなのに!!）
「ほら　おとなしくして」
「ンアッ!!」

「ここは今までと違って苦味が強いね　大人の味かな？」
「なっ　何バカなコト言ってるんですか?!　そこは本当に汚いんですからね?!」
「汚いからこうしてキレイにしてるんでしょ」
「だからそれがそもそもの間違いですって！」
「そんなこと言っても騙されないよ？　ちゃんとキレイになるまで逃がさないんだから」
「まだまだしっかり汚れをこそぎ落とさないとね」
「んあっ！　ダメ・・・そんなに押し拡げて・・・奥まで・・・」
「そ・・・それ以上奥は・・・もう・・・違うっ・・・」
ググッ
グニグニ

「ここは今までと違って苦味が強いね　大人の味かな？」
「なっ　何バカなコト言ってるんですか?!　そこは本当に汚いんですからね?!」
「汚いからこうしてキレイにしてるんでしょ」
「だからそれがそもそもの間違いですって！」
「そんなこと言っても騙されないよ？　ちゃんとキレイになるまで逃がさないんだから」
「まだまだしっかり汚れをこそぎ落とさないとね」
「んあっ！　ダメ・・・そんなに押し拡げて・・・奥まで・・・」
「そ・・・それ以上奥は・・・もう・・・違うっ・・・」
ググッ
グニグニ

「ここは今までと違って苦味が強いね　大人の味かな？」
「なっ　何バカなコト言ってるんですか？！　そこは本当に汚いんですからね？！」
「汚いからこうしてキレイにしてるんでしょ」
「だからそれがそもそもの間違いですって！」
「そんなこと言っても騙されないよ？　ちゃんとキレイになるまで逃がさないんだから」
「まだまだしっかり汚れをこそぎ落とさないとね」
「んあっ！　ダメ・・・そんなに押し拡げて・・・奥まで・・・」
「そ・・・それ以上奥は・・・もう・・・違うっ・・・」
ググッ
グニグニ

「ここは今までと違って苦味が強いね　大人の味かな？」
「なっ　何バカなコト言ってるんですか？！　そこは本当に汚いんですからね？！」
「汚いからこうしてキレイにしてるんでしょ」
「だからそれがそもそもの間違いですって！」
「そんなこと言っても騙されないよ？　ちゃんとキレイになるまで逃がさないんだから」
「まだまだしっかり汚れをこそぎ落とさないとね」
「んあっ！　ダメ・・・そんなに押し拡げて・・・奥まで・・・」
「そ・・・それ以上奥は・・・もう・・・違うっ・・・」
ググッ
グニグニ

「かはあっ!!」
「奥の方まで汚れがスゴイね　全部キレイにしなくちゃ」
「んはあっ！　裂けちゃうっ・・・ダメっ・・・抜いてっ！　抜いてくださいっ！」
「大丈夫だよ　チセだって毎日ここからぶっといウ〇チをひりだしてるんでしょう？」
「うあっ・・・ちからが・・・はいっ・・・てダメ・・・でちゃ・・・う・・・んんっ!!」
ズッッッッッ

「かはあっ!!」
「奥の方まで汚れがスゴイね　全部キレイにしなくちゃ」
「んはあっ！　裂けちゃうっ・・・ダメっ・・・抜いてっ！　抜いてくださいっ！」
「大丈夫だよ　チセだって毎日ここからぶっといウ〇チをひりだしてるんでしょう？」
「うあっ・・・ちからが・・・はいっ・・・てダメ・・・でちゃ・・・う・・・んんっ!!」
ズッッッッッッ
ぴぴぴ

「かはあっ!!」
「奥の方まで汚れがスゴイね　全部キレイにしなくちゃ」
「んはあっ！　裂けちゃうっ・・・ダメっ・・・抜いてっ！　抜いてくださいっ！」
「大丈夫だよ　チセだって毎日ここからぶっといウ〇チをひりだしてるんでしょう？」
「うあっ・・・ちからが・・・はいっ・・・てダメ・・・でちゃ・・・う・・・んんっ!!」
ぴぴぃ
ズッッッッッッ

「かはあっ!!」
「奥の方まで汚れがスゴイね　全部キレイにしなくちゃ」
「んはあっ!　裂けちゃうっ・・・ダメっ・・・抜いてっ!　抜いてくださいっ!」
「大丈夫だよ　チセだって毎日ここからぶっといウ○チをひりだしてるんでしょう?」
「うあっ・・・ちからが・・・はいっ・・・てダメ・・・でちゃ・・・う・・・んんっ!!」
ズッッッッッッ

「ぎゃぁぁぁ!!」

「ぎゅっ っ!」

「ぶびっっっ!!」

「ぎゅっ っ!!」

「あっ　こらチセ　ダメじゃないか
「おもらしなんて　子供じゃないんだから」
「でも・・・これは・・・」
「言い訳しないの」
「ご・・・ごめんなさい」
（・・・・・私が悪いの？）
せっかくキレイにしてるのにまた汚して」
はぁ
はぁ
はぁ
ヒク
ヒク

「あっ　こらチセ　ダメじゃないか
「おもらしなんて　子供じゃないんだから」
「でも・・・これは・・・」
「言い訳しないの」
「ご・・・ごめんなさい」
（・・・・・私が悪いの？）
せっかくキレイにしてるのにまた汚して」
はぁ
はぁ
はぁ
ヒク
ヒク

「あっ　こらチセ　ダメじゃないか
「おもらしなんて　子供じゃないんだから」
「でも・・・これは・・・」
「言い訳しないの」
「ご・・・ごめんなさい」
（・・・・・私が悪いの？）
せっかくキレイにしてるのにまた汚して」
はぁ
はぁ
はぁ
ヒク
ヒク

「あっ　こらチセ　ダメじゃないか
「おもらしなんて　子供じゃないんだから」
「でも・・・これは・・・」
「言い訳しないの」
「ご・・・ごめんなさい」
（・・・・・私が悪いの？）
せっかくキレイにしてるのにまた汚して」
はぁ
はぁ
はぁ
ヒク
ヒク

「ほら　汚れちゃったからこのまま前の方もキレイにするよ」
「いや・・・もう赦してください・・・」

「だめだめ　何度も言ってるでしょ？　もうウチの子になるんだから汚いままじゃおいとけないよ」
「それに何故だか　ここは一番しっかり舐めないとイケない気がするんだ」
「逆ですっ！　一番そういうコトしちゃダメな場所です！」
（あれ？　違う　一番そういうコトされちゃう場所？　いやいや違う違うっ　何を考えてるんだ私はっ！）
「ぴっちり閉じてるのに臭気が漂ってるね　これは開くと相当臭いんじゃないかな」

「ほら　汚れちゃったからこのまま前の方もキレイにするよ」
「いや・・・もう赦してください・・・」
「だめだめ　何度も言ってるでしょ？　もうウチの子になるんだから汚いままじゃおいとけないよ」
「それに何故だか　ここは一番しっかり舐めないとイケない気がするんだ」
「逆ですっ！　一番そういうコトしちゃダメな場所です！」
（あれ？　違う　一番そういうコトされちゃう場所？　いやいや違う違うっ　何を考えてるんだ私はっ！）
「ぴっちり閉じてるのに臭気が漂ってるね　これは開くと相当臭いんじゃないかな」

「ほら　汚れちゃったからこのまま前の方もキレイにするよ」
「いや・・・もう赦してください・・・」
「だめだめ　何度も言ってるでしょ？　もうウチの子になるんだから汚いままじゃおいとけないよ」
「それに何故だか　ここは一番しっかり舐めないとイケない気がするんだ」
「逆ですっ！　一番そういうコトしちゃダメな場所です！」
（あれ？　違う　一番そういうコトされちゃう場所？　いやいや違う違うっ　何を考えてるんだ私はっ！）
「ぴっちり閉じてるのに臭気が漂ってるね　これは開くと相当臭いんじゃないかな」

「ほら　汚れちゃったからこのまま前の方もキレイにするよ」
「いや・・・もう赦してください・・・」
「だめだめ　何度も言ってるでしょ？　もうウチの子になるんだから汚いままじゃおいとけないよ」
「それに何故だか　ここは一番しっかり舐めないとイケない気がするんだ」
「逆ですっ！　一番そういうコトしちゃダメな場所です！」
（あれ？　違う　一番そういうコトされちゃう場所？　いやいや違う違うっ　何を考えてるんだ私はっ！）
「ぴっちり閉じてるのに臭気が漂ってるね　これは開くと相当臭いんじゃないかな」

「イヤっ!!　開かないでぇ!!」
「ほら　やっぱり　ものすごい汚臭だね」
「あれ　でもどうして？　こんなところにヨーグルトがびっしり」
「なっ?!」
「人間はこんなところでヨーグルトが作れるんだね　知らなかったよ」
「ヨ・・・ヨーグルトって・・・それはそんなんじゃ・・・」

「え？　違うの？　それじゃこの酸っぱいニオイのする白いドロドロは何？」
「そ・・・それは・・・・・・お・・・お・・・お・・・・・・ヨーグルトですっ！」
（あぁっ！　汚マ○コカスだなんて恥ずかしくて自分で言えるわけない！）
（でも・・・オリモノと混ざって酸っぱいニオイもするし　確かに見た目はヨーグルトみたいかも・・・）
「やっぱりそうなんだね　何故隠そうとしたの？　さては後でこっそり一人で食べる気だったね？」
「独り占めしないで僕にも食べさせてよ」
「あぁ!!　食べちゃダメぇっ!!」
「おお　チセの自家製ヨーグルト　少し匂いがキツくて酸味が強いけど美味しいよ」
（食べないで!!　私の汚マ○コカス食べないでぇ!!）

くはぁ

「イヤっ!!　開かないでぇ!!」
「ほら　やっぱり　ものすごい汚臭だね」
「あれ　でもどうして？　こんなところにヨーグルトがびっしり」
「なっ?!」
「人間はこんなところでヨーグルトが作れるんだね　知らなかったよ」
「ヨ・・・ヨーグルトって・・・それはそんなんじゃ・・・」

「え？　違うの？　それじゃこの酸っぱいニオイのする白いドロドロは何？」
「そ・・・それは・・・・・・お・・・お・・・お・・・・・・ヨーグルトですっ！」
（あぁっ！　汚マ○コカスだなんて恥ずかしくて自分で言えるわけない！）
（でも・・・オリモノと混ざって酸っぱいニオイもするし　確かに見た目はヨーグルトみたいかも・・・）
「やっぱりそうなんだね　何故隠そうとしたの？　さては後でこっそり一人で食べる気だったね？」
「独り占めしないで僕にも食べさせてよ」
「あぁ!!　食べちゃダメぇっ!!」
「おお　チセの自家製ヨーグルト　少し匂いがキツくて酸味が強いけど美味しいよ」
（食べないで!!　私の汚マ○コカス食べないでぇ!!）

くぱぁ

「イヤっ!!　開かないでぇ!!」
「ほら　やっぱり　ものすごい汚臭だね」
「あれ　でもどうして？　こんなところにヨーグルトがびっしり」
「なっ?!」
「人間はこんなところでヨーグルトが作れるんだね　知らなかったよ」
「ヨ・・・ヨーグルトって・・・それはそんなんじゃ・・・」

「え？　違うの？　それじゃこの酸っぱいニオイのする白いドロドロは何？」
「そ・・・それは・・・・・・お・・・お・・・お・・・・・・ヨーグルトですっ！」
（あぁっ！　汚マ○コカスだなんて恥ずかしくて自分で言えるわけない！）
（でも・・・オリモノと混ざって酸っぱいニオイもするし　確かに見た目はヨーグルトみたいかも・・・）
「やっぱりそうなんだね　何故隠そうとしたの？　さては後でこっそり一人で食べる気だったね？」
「独り占めしないで僕にも食べさせてよ」
「あぁ!!　食べちゃダメぇっ!!」
「おお　チセの自家製ヨーグルト　少し匂いがキツくて酸味が強いけど美味しいよ」
（食べないで!!　私の汚マ○コカス食べないでぇ!!）

くはぁ

「イヤっ!!　開かないでぇ!!」
「ほら　やっぱり　ものすごい汚臭だね」
「あれ　でもどうして？　こんなところにヨーグルトがびっしり」
「なっ?!」
「人間はこんなところでヨーグルトが作れるんだね　知らなかったよ」
「ヨ・・・ヨーグルトって・・・それはそんなんじゃ・・・」

「え？　違うの？　それじゃこの酸っぱいニオイのする白いドロドロは何？」
「そ・・・それは・・・・・・お・・・お・・・お・・・・・・ヨーグルトですっ！」
（あぁっ！　汚マ○コカスだなんて恥ずかしくて自分で言えるわけない！）
（でも・・・オリモノと混ざって酸っぱいニオイもするし　確かに見た目はヨーグルトみたいかも・・・）
「やっぱりそうなんだね　何故隠そうとしたの？　さては後でこっそり一人で食べる気だったね？」
「独り占めしないで僕にも食べさせてよ」
「あぁ!!　食べちゃダメぇっ!!」
「おお　チセの自家製ヨーグルト　少し匂いがキツくて酸味が強いけど美味しいよ」
（食べないで!!　私の汚マ○コカス食べないでぇ!!）

くぱぁ

「うーん・・・何だろ？　背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「・・・さあ」
「それに・・・さっきから股間のあたりに見たことない突起物が・・・ほら見て」
「・・・・・・・・・ワオ」

「よく分からないけどチセの臭いニオイを嗅いだり汚物を舐めたりしながらコレを触ると何故かとても気持ち良いんだ・・・」
「ちょっ　何してるんですか!!　やめてください!!」
「あれチセ　もしかしてコレが何か知ってるの？」
「いや　それがナニ・・・かは知ってるような知らないような・・・」
「やっぱり知ってるんだね？　チセ　チセどうしたら良い？　ねぇどうしたら良い？」
「どうもこうも　とりあえず手を止めっ・・・」
「チセ!　チセ?!」
「なっ　なんですかっ?!」
「多分なんだけど　魔法使いの勘なんだけど！」
「は　はいっ?!」

「うーん・・・何だろ？　背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「・・・さあ」
「それに・・・さっきから股間のあたりに見たことない突起物が・・・ほら見て」
「・・・・・・・・・ワオ」

「よく分からないけどチセの臭いニオイを嗅いだり汚物を舐めたりしながらコレを触ると何故かとても気持ち良いんだ・・・」
「ちょっ　何してるんですか!!　やめてください!!」
「あれチセ　もしかしてコレが何か知ってるの？」
「いや　それがナニ・・・かは知ってるような知らないような・・・」
「やっぱり知ってるんだね？　チセ　チセどうしたら良い？　ねぇどうしたら良い？」
「どうもこうも　とりあえず手を止めっ・・・」
「チセ?!　チセ?!」
「なっ　なんですかっ?!」
「多分なんだけど　魔法使いの勘なんだけど！」
「は　はいっ?!」

「うーん・・・何だろ？　背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「・・・さあ」
「それに・・・さっきから股間のあたりに見たことない突起物が・・・ほら見て」
「・・・・・・・・・ワオ」

「よく分からないけどチセの臭いニオイを嗅いだり汚物を舐めたりしながらコレを触ると何故かとても気持ち良いんだ・・・」
「ちょっ　何してるんですか!!　やめてください!!」
「あれチセ　もしかしてコレが何か知ってるの？」
「いや　それがナニ・・・かは知ってるような知らないような・・・」
「やっぱり知ってるんだね？　チセ　チセどうしたら良い？　ねぇどうしたら良い？」
「どうもこうも　とりあえず手を止めっ・・・」
「チセ!　チセ?!」
「なっ　なんですかっ?!」
「多分なんだけど　魔法使いの勘なんだけど！」
「は　はいっ?!」

「うーん・・・何だろ？　背中かな・・・腰かな・・・ムズムズする・・・どうして？」
「・・・さあ」
「それに・・・さっきから股間のあたりに見たことない突起物が・・・ほら見て」
「・・・・・・・・・ワオ」

「よく分からないけどチセの臭いニオイを嗅いだり汚物を舐めたりしながらコレを触ると何故かとても気持ち良いんだ・・・」
「ちょっ　何してるんですか!!　やめてください!!」
「あれチセ　もしかしてコレが何か知ってるの？」
「いや　それがナニ・・・かは知ってるような知らないような・・・」
「やっぱり知ってるんだね？　チセ　チセどうしたら良い？　ねぇどうしたら良い？」
「どうもこうも　とりあえず手を止めっ・・・」
「チセ?!　チセ?!」
「なっ　なんですかっ?!」
「多分なんだけど　魔法使いの勘なんだけど！」
「は　はいっ?!」

「・・・何か出ちゃう」
「なっ?!」
「ささ触っちゃダメです！　それ以上刺激しちゃダメ！　手を放してくださいっ！」
「ダメだよチセ　多分何かの呪いだと思う・・・手が勝手に動いて自分じゃ止められないんだ」
「気のせいですっ！　止められます　止められますからっ！」
「チセっ！　チセっ！　何かくるよっ!!　恐いよ!!　助けてチセぇぇぇっ!!」
「人の話聞けや　この畜生がぁぁぁっ!!」

「・・・何か出ちゃう」
「なっ?!」
「ささ触っちゃダメです！　それ以上刺激しちゃダメ！　手を放してくださいっ！」
「ダメだよチセ　多分何かの呪いだと思う・・・手が勝手に動いて自分じゃ止められないんだ」
「気のせいですっ！　止められます　止められますからっ！」
「チセっ！　チセっ！　何かくるよっ!!　恐いよ!!　助けてチセぇぇぇっ!!」
「人の話聞けや　この畜生がぁぁぁっ!!」

「・・・何か出ちゃう」
「なっ?!」
「ささ触っちゃダメです！　それ以上刺激しちゃダメ！　手を放してくださいっ！」
「ダメだよチセ　多分何かの呪いだと思う・・・手が勝手に動いて自分じゃ止められないんだ」
「気のせいですっ！　止められます　止められますからっ！」
「チセっ！　チセっ！　何かくるよっ!!　恐いよ!!　助けてチセぇぇぇっ!!」
「人の話聞けや　この畜生がぁぁぁっ!!」

「・・・何か出ちゃう」
「なっ?!」
「ささ触っちゃダメです！　それ以上刺激しちゃダメ！　手を放してくださいっ！」
「ダメだよチセ　多分何かの呪いだと思う・・・手が勝手に動いて自分じゃ止められないんだ」
「気のせいですっ！　止められます　止められますからっ！」
「チセっ！　チセっ！　何かくるよっ!!　恐いよ!!　助けてチセぇぇぇっ!!」
「人の話聞けや　この畜生がぁぁぁっ!!」

「ぶううるうぅあああああっ!!」
「イヤっ!! んっ!! んんんっ!!」
んん
う
ビュビュ
ビュルルビュル
ビュルル

『ぶううるうぅあああああっ!!』
『イヤっ!! んっ!! んんんっ!!』
んん
う
ビュビュ
ビュルルビュル
ビュルル

『ぶううるうぅあああああっ!!』
『イヤっ!! んっ!! んんんっ!!』
んん
う
ビュビュ
ビュルルビュル
ビュルル

『ぶううるうぅあああああっ!!』
『イヤっ!! んっ!! んんんっ!!』
んん
う
ビュビュ
ビュルルビュル
ビュルル

「これ・・・は・・・・・・もしかしてコレが僕の交尾器・・・なのかな？」
「・・・・・・・・」
「それじゃこれは僕がチセに発情して射精しちゃったってこと？」
「・・・・・・・」
はぁ
はぁ
はぁ
「実は僕　自分で自分が何なのかもよく分かってないし
今まで発情って感覚も興味も無かったから
こんな機能が備わっているかどうかも　よく分ってなかったんだ」
「これで僕にもちゃんと交尾器があるって分かって良かったよ」
「・・・そうですか」

「これ・・・は・・・・・・もしかしてコレが僕の交尾器・・・なのかな？」
「・・・・・・・」
「それじゃこれは僕がチセに発情して射精しちゃったってこと？」
「・・・・・・」
はぁ
はぁ
はぁ
「実は僕　自分で自分が何なのかもよく分かってないし
今まで発情って感覚も興味も無かったから
こんな機能が備わっているかどうかも　よく分ってなかったんだ」
「これで僕にもちゃんと交尾器があるって分かって良かったよ」
「・・・そうですか」

「これ・・・は・・・・・・もしかしてコレが僕の交尾器・・・なのかな？」
「・・・・・・・・」
「それじゃこれは僕がチセに発情して射精しちゃったってこと？」
「・・・・・・・」
はぁ
はぁ
はぁ
「実は僕　自分で自分が何なのかもよく分かってないし
今まで発情って感覚も興味も無かったから
こんな機能が備わっているかどうかも　よく分ってなかったんだ」
「これで僕にもちゃんと交尾器があるって分かって良かったよ」
「・・・そうですか」

「これ・・・は・・・・・・もしかしてコレが僕の交尾器・・・なのかな？」
「・・・・・・・」
「それじゃこれは僕がチセに発情して射精しちゃったってこと？」
「・・・・・・」
はぁ
はぁ
はぁ
「実は僕　自分で自分が何なのかもよく分かってないし
今まで発情って感覚も興味も無かったから
こんな機能が備わっているかどうかも　よく分ってなかったんだ」
「これで僕にもちゃんと交尾器があるって分かって良かったよ」
「・・・そうですか」

「ところでチセ・・・」
「・・・はい・・・」
「・・・これがキレイ・・・なのかな・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・知らんがな」
完

「ところでチセ・・・」
「・・・はい・・・」
「・・・これがキレイ・・・なのかな・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・知らんがな」
完

「ところでチセ・・・」
「・・・はい・・・」
「・・・これがキレイ・・・なのかな・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・知らんがな」
完

「ところでチセ・・・」
「・・・はい・・・」
「・・・これがキレイ・・・なのかな・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・知らんがな」
完